

「人間喜劇」の「私生活場景」における「青春」の意味

西川祐子

(一) 青春

「新鮮さにあふれ、色彩と若さとに輝く『私生活場景』は、この本（『十九世紀風俗研究』）が完成すれば、朝の目さめ時、やがて花咲かんと蕾のふくらみつつある時期における人生を形づくるはずである。それは第一に、ただ一個所のすき間からのぞかれてはいるが知的形成の最初の段階において鮮やかに捉えられ、描かれた幼年期（*enfance*）となるだろう。」（『哲学研究』——一八三四年——の前期、フェリックス・ダヴァン）⁽¹⁾

「私生活場景」では人生は、終ろうとしている思春期（*puberté*）の最後の発展と、始ろうとしている成年期（*virilité*）の最初の打算との間において捉えられている。だからそこには主として軽はずみな感情や感覚が描かれる。世の中の動きを知らないばかりに引きおこされた過失も書かれる。女性人物についていえば、彼女達の不幸は、愛情の誠実を信じたり、やがては人生の教訓が消し去られていくはずの夢に執着していたりするところから来る。青年は純粹である。彼等の不幸は、彼等が、社会の法律と、極く自然な欲望や本能の最も力強く働く時期における絶対的な欲求との間に生ずる対立を

理解しないところから生ずる。」（『十九世紀風俗研究』——一八三四年——前期書、フェリックス・ダヴァン）⁽²⁾

「私生活場景」は幼年期（*enfance*）と青春（*adolescence*）と、その過ちを表す。」（『人間喜劇』序文）⁽³⁾

バルザックの「人間喜劇」の作品中、この場景に分類されているのは別表の二七篇である。

「人間喜劇」の読み方には、作品を執筆年代順に読むとか、小説の中に扱われる時代を追って、いわば虚構の時の流れに従う行き方とか、あるいは登場人物達を階層別の群に分けるとか、いろいろな方法が考えられる。しかし、バルザックの目指した体系の理解を目的とする時には、作者自身の編集に従うのが適切であろう。

バルザックは「風俗研究」を六つの場景に分け、各場景の性格を一つの人生の各時期の、あるいは、一日の行程の各時間のイメージをもって説明した。「私生活場景」は人生の入口である「青春」、「地方生活場景」と「パリ生活場景」は「壮年」、「田園生活場景」は一日の行程の終りの「夕暮」である。

バルザックの意図に従って「私生活場景」を「人間喜劇」の序章

しとして読もうとするとき、「青春」という比喩は何を意味するだろうか。

フェリックス・ダヴァンの解説にあるように、「私生活場景」の主人公は、はじめて人生と社会に立向う若い男女である。「青春」は先ず「私生活場景」の題材を指す。別表の「作品中に取扱われた時代」の項を見よう。「私生活場景」の特色は、時代が大部分一八三〇年まで、それも王政復古時代（一八一五年—一三〇年）に集中していることである。「パリ生活場景」になると時代は執筆年代と同時代の七月王政時代中心に移るといえよう。「登場人物」の項と「関連事項」の項を見ると、やがては「人間喜劇」の七月王政時代に政界、法曹界などを支配するはずの人物が「私生活場景」では、まだ二十代の青年として登場していることがわかる。「私生活場景」には「人間喜劇」の作中人物達の青春の物語があるのだ。

この場景は、作者バルザック自身の青春の跡をもとめている。「私生活場景」の多くの作品には二重の年代がある（前表では「記号」。すなわち、執筆年代と同じ一八三〇年代の或る日、すでに壮年に達した人物が、王政復古時代にあつた自己の青春を回顧し語るという形式である。これはそのまま、一七九九年生れの作者バルザックが、一八三〇年にいたつて「私生活場景」を書く時の姿勢であつた。ラスチニヤック、ピアンションの質素な学生生活、デルヴィルの法律事務所などの描写には、一八二〇年代の作者の体験がとり入れられているものと思われる。「私生活場景」の主題が最初にはつきりした形をとつて短篇集にまとめられた一八三〇年は、バルザックの二十代をおおつていた王政復古時代が終つた年であつた。そ

して、現在「私生活場景」に分類されている作品のうち半数は一八三〇年から三四年の短い期間のうちに續けて發表されている。

また、「青春」、「壮年」、「夕暮」といつた比喩は作者の人生と社会に対する視点の置き方を表わす。「壮年」である「地方生活場景」では視点は現実に密着している。「田園生活場景」は、すでに人生を終えたと自覚する人物の眼をとおして社会が描かれ、現実からはある距離の置かれたユートピア小説となつた。「私生活場景」の主人公である青年は未知のものとしての人生に對面する。この姿勢は、小説にどのような形であらわれるだろうか。

以下、作者自身が用いた「青春」という比喩を手がかりに、作品に即して「私生活場景」の性格、「人間喜劇」におけるその役割を考えたい。

「私生活場景」の作品は、書かれた時期から三つに分けることが可能に思われる。それぞれの時期を代表する作品をとり上げた。

I期、「人間喜劇」構想（一八三四年の「十九世紀風俗研究」）以前。

「結婚の生理学」（一八二九年）、「私生活場景」短篇集第一版（一八三〇年）

II期、「人間喜劇」構想の時期

「三十女」（一八三〇—一八三四年）、「ゴリオ爺さん」（一八三四年）

III期、「人間喜劇」構想以後

「二人の若妻の手記」（一八四一年）

註 (1) L'oeuvre de Balzac (Le club français du livre), tome 15, p. 108.

(2) ibid, p. 128.

(3) Œuvres Complètes de Balzac (Conard), t. 1, P. XX

XVII

(4) ベナシス(「田舎医者」)、ヴェロニク(「村の司祭」)

二 「結婚の生理学」(一八二九年)

「(『結婚の生理学』の)直後に、私は私の思想をさらに敷衍し、心をうづ描写によってその思想を若い魂の中につきこむために『私生活場景』(短篇集を指す)を書いたのです。」(カストリー夫人への手紙、一八三一年十月十日)

「私生活場景」に入る前に、先ず「私生活場景」と関連の深い「結婚の生理学」を検討したい。「結婚の生理学」とはどんな本か。バルザック自身パンタグリュエリスムと呼んだ陽気で露骨な饒舌と、豊富なエピソードで膨れ上り、妻を飼育するために専制君主たる夫が用いるべきマキアベリスムの数々が長々と並べられているこの書物について、作者は自ら次のように解説してその逆説的傾向を弁護している。

「『結婚の生理学』は女性を擁護する目的で企てられた本です。ですが、もし私が女性解放と、もっと広い完全な教育を女性に与えることに役立つ思想をひろめるところから筆を起したとしたら、私はたかだか有益な一個の理論を器用に説く作家という風に考えられしてしまうでしょう。ですから私は、私の思想を、読者の精神を自覚

めさせ、深く考えこむ反省を残すような辛辣で皮肉な形式の下に発展させたのです。」(前出、カストリー夫人への手紙)

また「パリ通信」(一八三一年)の中では一八三〇年を代表した四冊の本を選び、その中にスタンダールの「赤と黒」と並べて自分の「結婚の生理学」をあげた。

「この四冊の文学作品の中には、時代の真髓があります。消えゆく一つの社会の屍臭があるのです。『生理学』の匿名の筆者は、我々から結婚の幸福の幻想を取り除くという、社会に対する第一の貢献をすることに喜びを感じています。」(パリ通信⁽²⁾)

二つの文章から、バルザックが、この本の中で結婚という社会制度について、さらにそれと関連して女性の社会的立場について考察しようという抱負を持っていることがうかがえる。

「生理学」序文によれば、この本の主題は、「結婚は決して自然にその源をもつものではない。(……)人間は自然の代行者であって、社会は自然の上に接木されている—法律は風俗の為につくられ、その風俗は多様である。従って結婚も人間に関するあらゆる事柄が従わねばならぬように見える段階的改良の過程を通じて完成に向う可能性がある。」というナポレオンの言葉と、法律を勉強していた若いバルザックがしばしば行き当った「姦通」(adultère)という法律用語の与えた深い感銘から徐々に生れたという。以来、一人の女の一寸した身振りとか、耳にはさんだゴシップとかが、ことごとく作者を考えさせる契機となり、そして出来た無数の観念が次第に結晶して一個の思想の形をとり出した、という風に解説される。「青年時代の感覚や、本人でさえ手をやく押しつけがましい力がさせた

1829	Physiologie du mariage		
------	------------------------	--	--

Scènes de la vie privée

初出版年代	題名 ◎—特に注目する作品	とりあつかわれた時代・主な登場人物とその年齢 ——二重構造——「人間喜劇」中重要人物。——準重要人物	関連事項 () 再登場作品名
1830	◎Scènes de la vie privée, première édition La Maison du Chat-qui-pelote Le Bal de Sceaux La Vendetta Une Double famille La Paix du Ménage Gobseck	1810~1818 Augustine, 18才~ 1819~27 Emilie de Fontaine, 22才~ 1800~15 Ginerva, 20才前後 1806~1816~1822, 1833 Comte Granville, 24才~ 51才 1809 Comtesse de Soulanges, 20才前後 1816~1818, 1830 Derville, 24才 38才 Comtesse de Restaud, 25才 Gobseck	法曹界重鎮 (Splendeurs et Misères des courtisanes) 弁護士 (César Birotteau, Colonel Chabert 他) Goriot の娘, 上流社交界婦人 (Père Goriot 他) 高利貸
1830	Etude de Femme	1822 Marquise, de Listomère Rastignac, 24才	七月王政時代大臣 (Père Goriot 他)
1832	Scènes de la vie privée, 2 ^e édition La Bourse Le Message	1819 Schinner, 25才前後 1819 Comtesse de Montpersan 30才	上流社交界婦人
1830~34	◎La Femme de Trente ans	1813~1844 Marquise d'Aiglemont 20才~55才 Charles de Vandenesse	Reines de Paris の1人 外交官
1832	La Femme Abandonnée	1822 Marquise de Beauséant 30才	上流社交界婦人 Reines de Paris の1人(Père Goriot 他)
1832	Madame Firmiani	1822—1824 M ^{me} Firmiani (M ^{me} Octave de Camps), 25才~27才	上流社交界婦人
1832	La Grenadière	1820 lady Brandon Marie Gaston 10才	詩人, (Mémoires de deux jeunes mariées)
1832	Le Colonel Chabert	1818, 1840 Colonel Chabert Derville 26才	弁護士 (Gobseck 他)
1834~1835	◎Le Père Goriot	1819~1820 Goriot Vautrin Rastignac 22才 Bianchon 23才 Comtesse de Restaud 28才 Baronne de Nucingen 27才 Marquise de Beauséant 28才	脱獄囚 (Illusions perdues 他) 七月王政時代大臣 医師 上流社交界婦人 (Gobseck 他) 社交界婦人 上流社交界婦人 (La Femme Abandonnée 他)
1835	Le Contrat de Mariage	1821~1827 Comte Manerville 28才~34才 Henri de Marsay 36才	七月王政時代総理大臣 (La Fille aux yeux d'or 他)
1836	La Messe de l'Athée	1802, 1821, 1831 Bianchon 24才 Desplein	医師 (Père Goriot 他)
1836	L'Interdiction	1828 22才?, 40才 50才 Marquise d'Espard J.-J. Popinot, Camusot Rastignac, Bianchon	上流社交界婦人 Reines de Paris の1人 裁判官
1838~1839	Une fille d'Eve	1833~1834 Comtesse de Félix de Vandenesse 25才 Nathan	Granville の娘 (Une double famille) ジャーナリスト (Illusions perdues 他)
1839	Béatrix	1836~1839 Guénic	
1841	La Fausse Maîtresse	1835~1842 Comtesse Adam Laginska 19才~	
1841~1842	◎Mémoires de deux jeunes mariées	1825~ M ^{me} Marie Gaston (Louise de Chaulieu) 17才~30才 Comtesse Renée de l'Estorade 17才~30才 Oscar Husson 19才~35才 Comte de Sérisy	
1842	Un début dans la vie	1822~1838 Albert Savarus	
1842	Albert Savarus	1834~1835 Albert Savarus	
1842	Autre Etude de Femme	1817, 1842 De Marsay 17才 42才 1812, 1842 De Montriveau 1808, 1842 Bianchon	
1843	Honorine	1824~1830, 1836 Comtesse Beauvan (Honorine) 17才~	
1844	Modeste Mignon	1829 Modeste Mignon 19才 Ernest de la Brière 29才 Canalis 29才	詩人, 政治家 (Illusions Perdues 他)

観察が、きわめて些細な出来事にまで支点を見つけた。(4)

初版の「若い独身者」(Jeune célibataire) という著者の署名が示すとおり、「結婚の生理学」は、若い男の未知の人生にたいする生き生きとした好奇心を契機として生れた本なのである。

「生理学」の内容は「総論」と、その具体的な敷衍である「内外の防衛手段について」「内乱について」の三部に分れる。「総論」は、「姦通」という刺激的な語の分析によって展開されている。

「姦通」は、法律的には、主として女性に適用された罪であった。しかしこの本では「女性」を定義しなければならぬ。ここで、「淑女」(femme honnête) という特殊な語が使われる。

「淑女」とは、既婚者で決して生産労働や家事労働に従事せず、特権的教育の結果である華々しい教養と趣味を身につけ、闔房の長椅子に数時間ねそべって過す暇を持つ女のことである。彼女だけが、恋愛という精神生活を享樂することが出来る。「淑女」であるためには、彼女の夫は田舎では六千フラン、パリで二万リーブルの年収が必要。結局統計学上から人口三千万の当時のフランスには四十万の「淑女」がいることになる。(考察2夫婦の統計、考察3淑女について)

一方、千五百万の男性から貧乏人九百万をひき、残り六百万から十七才以下五十二才以上の者を引く、さらに残り三百万から妻帯者百万をひくと二百万の独身者が残る。才能を鍛え、機会をつかめば階級上昇も可能な時代にあつて、野心のためにも彼等には美女が必要である。二百万の独身者のうち百万は種々の理由から純潔な生活を送るとしても残りの百万は平均三つの恋愛をする。故に三百万の

情事が成立。しかもこの数字に対応すべき「淑女」の数は四十万である。

男性の平均結婚年令は三十才、自然の欲望が発達する年令は二十才。この間十年間、欲望を満す合法的方法がないのなら、既婚者の家庭を守る為には、娼婦を職業団体とし、売春を制度化する他ない。(考察4貞節なる女について)

また、結婚それ自体、不幸に終るべく予定されている。男が結婚に関して考慮するのは生殖と所有権の確保だけであるから、魂の完全な結合による幸福は結婚からは生れない(考察5予定された人々について)。一方、若い娘は寄宿学校や修道院に閉じこめられ、無為の生活がもたらす危険な想像で頭を一杯にしている。(考察6寄宿学校について)。彼女はごく偏った教育しか与えられていないので、結婚にあらゆる幸福を期待して新生活をはじめ(考察7ハネムーンについて)。蜜月が終ると彼女は自分の意志が全く無に帰していたことに気づき、自己の尊厳の回復にとめだす。小説を読む女。信心にこる女。社交界に熱中する女。やがて妻は女性にとって自由意志が回復出来るのは恋人をつくることによってだけだと見ぬ(考察8最初の徴候について)。

バルザックの解決案自体は、アメリカ、スイスなどのプロテスタント国におけるような娘の解放、結婚の自由、さらに女性を所有関係の埒外に置く、という折衷案である。女性からだけでも財産相続権をとり去り、持参金制度も廃止すれば、結婚はもっと浄化され、幸福になるはずだ、という。(考察9エピソード)

問題外に除き、人間扱いしていないからといって、そこに彼の貴族趣味をのみ見出すのは誤りであろう。「淑女」は「男性が金の力と文明の精神的熱気のおかげで、今日までその栽培にそそぎこむことのできた特別な心づかいの賜物」である。文化が頂点において凝縮したような極端な洗練とそれに比例する頹廢の組合せが作者の眼をひきつけたのは、彼女達の存在が文明全体の批判になっていたからであった。「姦通」と「売春」という社会から弾劾されている惡徳は、実は結婚という現行の社会制度自体が生みだすものだ、と指摘する。結婚の不幸は、社会制度の欠陥の表現である、というのが「生理学」の思想である。

「生理学」には、風俗の觀察と分析が先ず格言フレイスマと呼ばれる一行か二行の無数の定理にまとめられ、定理の一つ一つに、その内容を敷衍する社交界の会話をおもわせる機智に富んだエピソードと作者のおしゃべりがはさまれてつながり、それが積み重って結論の思想となる、という構造がある。

一部は「生理学」と平行して書かれ、「生理学」の翌年一八三〇年に「私生活場景」と題して発表された六篇の短篇小説は、この「生理学」のエピソードが肉づけされ独立したものと考えられる。

- 註(1) Balzac : Correspondances (Garnier), tome 1, p. 500
(2) Œuvres Diverses (Conard) tome II, p. 113
(3) Physiologie du Mariage (Ollendorff, tome 43), p. 1
(4) *ibid.*, p. 3
(5) この時代に一方ではサン・シモン主義者達が結婚制度の矛

盾を解決するには、女性だけでなく、すべての人間について相統権を廢止しなければならないと主張していた。

- (6) Physiologie du Mariage (Ollendorff, tome 43), p. 29
(7) 「結婚の生理学」は、あの織細で生き生きとしており、冷笑的でしかも陽気な十八世紀の文学に帰るためになされる試みである」(Balzac : Préface de la première édition de la Peau de Chagrin)

三 「私生活場景」短篇集(一八三〇年)

「手まり猫屋」(一八三〇年の題名は「栄光と不幸」)は、貴族で画家である青年に見染められて、父親の忠告をしりぞけ、階級の違う結婚にふみきったブルジョワジー出身の娘オギュスチヌの話である。この結婚は十八カ月の幸福な蜜月ののち、次第に夫婦の出身階級の差からくる習俗と教養と考え方の食い違いが明らかになり、オギュスチヌのいたましい努力にもかかわらず悲劇的結末をとげる。

「結婚の生理学」の格言フレイスマ 13には、
「芸術家の妻は必ず淑女である」とあった。同じく10に、

「銀行家の妻は必ず淑女であるが、店の勘定場に坐っている女は、夫が手広く商売をし、彼女が店の二階に住んでいない限りにおいてのみ淑女である。」と書かれてゐる。

オギュスチヌの母と姉は一生を勘定台の前に坐って暮し、決して「淑女」ではなかった。商店街からぬけ出して画家と結婚したオギュスチヌは夫の芸術を理解できるようになろうとして、また社

交界で夫に妻をひげ目に感じさせないために、少女時代の教育の欠陥を補い、教養を身につける努力を重ねる。しかし、「淑女」とは、最初から特権的風土におかれるのでなければ育たない産物であった。オーギュスチヌはある程度の進歩はする。しかし、幼時より植えつけられた宗教心とブルジョワ的偏見が知性の完全な進歩を妨げる。

オーギュスチヌに対置されているのは、フォーブル・サン・ジェルマン街社交界の花型カリグリアノ公爵夫人である。この三十六才の美しい女が物憂げに長椅子に横たわっている小部屋は、爛熟した文明の粹をこらしたものと描かれている。公爵夫人は「淑女」の典型であった。オーギュスチヌの夫は妻が与えてくれない精神的享楽を公爵夫人の小部屋の中に求めていた。公爵夫人は無邪気なオーギュスチヌに向けて「結婚の幸福はいつも一個の投機であり事業であった……人生は闘争である」という「結婚の生理学」にある教訓を垂れる。⁽⁴⁾

短篇集の中でも最初に、そして「生理学」と平行して書かれた「手まり猫屋」には、娘の教育の欠陥、理解の生れない結婚の不幸、「淑女」といった「生理学」の命題がそのままの形で見られる。

「ソーの舞踏会」では、王政復古時代にこの時代を支配している立憲君主制の精神をよくこころえた賢明な父親の忠告にもかかわらず、由緒正しい大貴族とでなければ結婚しないと、時代錯誤なわがままを言い張り、理想の恋人も貴族の称号を持っていないという理由だけで拒み、遂に七十才の老貴族と結婚する破目にいたるエミ

ーの話である。

ここでも誤った教育が娘の悲劇の原因となっている。エミリーには甘やかされて育った末娘、という設定がある。

「ゴブセック」(最初の題名は「不身持の危険」)では、若い恋人に迷って夫の所有のダイヤモンドまで持出したレストー伯爵夫人が、夫の死に際し、不義の子にも財産相続権を確保しようと狂奔する。そういう女の姿を、高利貸しのゴブセックがまだ若い二等書記官だったデルヴィルに指し示し、人生について解説をくわえる。

「この世では何も定ったことはない。風土に従って変化する風俗があるばかりだ。」「確かな値打のある物質はただ一つ、黄金だ。」⁽⁵⁾ ここにはレストー夫人を通じて社交界の典型的な情事の姿が描かれている。

「二重の家庭」(最初の題名は「出世したグリセット」次いで「貞節な妻」)には、グランヴィル裁判官の信心にこりかたまつた冷い正妻アンジェリクとの家庭と、お針女あがりのカロリーヌとの第二の家庭とが描かれる。二重の家庭は共に破綻を来し、グランヴィルは自分の悲劇を息子に教訓として残す。

最初は清純で信心深い都会を知らぬ田舎の良家育ちの娘という程度だったアンジェリクが、夫の誤った女房教育のため、次第に自己の意志の回復を企りだして、「頭痛」(malbraine)を口実に夫の意志に逆うことを覚え、次第に家中を修道院さながらに飾りつける本物の信心家になりゆく過程は、「生理学」の考察8「最初の徴候」の章の敷衍である。「貞節な女」(la femme vertueuse)というのも、「生理学」の章の題名であった。

「家庭の平和」は若妻が他の女に心をひかれてゐる夫を取り戻す話である。年とつた伯母が彼女を助け、「家庭の平和」を保つ難しさを説く。

「ヴァンデッタ」ではコルシカ生れの娘がパリで父親の仇敵の息子と愛し合い、父親の家を捨てたが、後に貧窮のうちに死ぬ。

最初の「私生活場景」短篇集を形づくっていた以上六篇の作品は、互いに似かよつた構成を持つてゐる。

1、「青年」対「老年」の単純な図式

父親の経験に対する娘の夢想の反抗が小説の葛藤を生み、夢想の敗北がその破局となるというのが「手まり猫屋」、「ソーの舞踏会」、「ヴァンデッタ」に共通の単純な構成であつた。

「ゴブセック」、「二重の家庭」、「家庭の平和」では、狂言まわしや、語り手の役を演ずるのが老人であつて、彼は傍の青年のために、人生劇の幕を持ちあげ、人生を図解してみせる。

それは作者バルザックが「私生活場景」短篇集の読者に対してとる態度でもある。初版の序文の中で、バルザックは賢明な母親が娘に人生教育のためにこの本を読まずように、と希望している。短篇集は「生理学」の命題を敷衍である、という意図が明確なだけに、思想はむきだしの形で語られ、「生理学」で用いられた特殊な用語がそのまま用いられた。

単純で図式的な構成の中にあつて、主人公の「青年」、特に若い娘は、最初、極端に無知であり、ほとんど性格さえ持たないため、丁度、異なる培養体の上に置かれ反応を観察される純粋な菌（ピュア・セル）のよう秀れた被実験体の役目をする。

一方、「老人」はすでに性格と経歴と環境を持つてゐる。しかし、「手まり猫屋」のギョーム氏をセザール・ピロトーに、ゴブセックをグランデに比較するなら、同じタイプでありながら「私生活場景」の人物達は観念的であり、「人物化された典型」と呼ばれる「哲学研究」の人物に近い。

「私生活場景」短篇集は、「二つの夢」、「知られざる傑作」、「あら皮」などの哲学小説（一八三〇—三一年）と近い時期に書かれてゐる。主題に形而上の問題と、形而下の問題という領域の差はあつても、「私生活場景」は哲学小説と同じく、観念小説の手法で書かれてゐるといえないだろうか。

2、人間形成の過程

老人の口を借りて、直接に人生を教える他に、原因と結果を結び、ある人間の形成の過程を見せて教えるという方法もとられた。最初は、全く白紙のまま人生に立向つた若い娘が、小説の結末では経験の刻印をおされて一つのはっきりした性格を持つようになる。

「ソーの舞踏会」のエミリーは、ありふれた一人のわがまま娘にすぎなかつたが思い上りを残酷に罰せられた後には、他人の青春を激しく憎むという偏執をもつた女となる。後に書かれた「イヴの娘」では、シャルル・ヴァンドネスと再婚したエミリーが再登場し、十二才年下の美しい義妹を嫉妬する。

「二重の家庭」のグランヴィルは出世の機会にも恵まれた平凡な青年であつたが、やがて家庭の不幸のしるしを刻んで青ざめ、ゆがんだ中年の顔を持つようになる。以後、他の小説に再登場する時のグランヴィルの僧侶嫌ひ、家庭の不幸に対する同情といった行為は

「二重の家庭」に描かれた彼自身の不幸を動機とするであろう。

「私生活場景」短篇集は、「結婚の生理学」から直接に生まれた作品である。しかし「生理学」の数々の挿話と、「私生活場景」短篇小説が異なる点は、短篇小説中の風俗描写の存在である。「生理学」の挿話は、実在の人物の行動や社交界の噂話などを暗示しながらも内容は時代を越えた男女の心理をうがったような普遍的なものが多かった。それに反し短篇小説では、帝政末期の商家が世代的交代をする場面（「手まり猫屋」）とか、王政復古時代に旧貴族と新興勢力が入りまじってたちまわるありさま（「ソーの舞踏会」）とか、描写されている。そして観念小説の図式的構成と風俗描写は互いに矛盾しない。描写は、この構成において、対照面を鮮明にきわだたせるのに役立つのである。例えば「手まり猫屋」における商家と、上流貴族の生活の違い、「ゴブセック」におけるレスト夫人の部屋とお針女の部屋の対照などがそれである。

短篇小説は「生理学」の命題をうけつぎ、「生理学」には含まれた挿話の成長したものである。次に、短篇小説がさらに長篇小説に成長する過程を見よう。

註(1) Physiologie du Mariage, p.43

(2) *ibid.*, p. 44

(3) La Maison du Chat-qui-pelote (Conard tome I) p. 64

(4) 《Le Mariage est un combat.》
(Physiologie du Mariage) p. 22

(5) Gobseck (Conard tome V) p. 389

四 「三十女」(一八三〇—三四年)、「ゴリオ爺さん」 (一八三四年)

「三十女」は、ばらばらに書かれた六篇の短篇から成立している。

第一篇「最初の過失」(一八三一年発表。「私生活場景」短篇集第二版に入る。)

主人公ジュリー・デグルモン十八才と二十六才?

第二篇「知られざる苦惱」(一八三四年)、ジュリー二十六才

第三篇「三十女」(一八三二年)、ジュリー三十才

第四篇「神の業」(一八三一年、三四年。「私生活場景」短篇集第二版) ジュリー三十四才、

第五篇「二度の出会い」(一八三一年。「私生活場景」短篇集第二版)、ジュリー三十六才と四十二才。長女エレヌ十八才と二十四才?

第六篇「罪ある母の晩年」(一八三二年。「私生活場景」短篇集第二版)、ジュリー五十五才。末娘モイナ二十才?

六篇のうち四篇は、一八三二年に「私生活場景」短篇集第二版に収められた。しかし、この時には各篇の女主人公の名前は現在とは異なっており、各篇の間に関連はなかった。一八三四年の「十九世紀風俗研究」の中ではじめて四篇と更に付加された二篇が「同じ物語」という題名の下に一括された。さらに、一八四二年の「人間喜劇」の中に入れられるときに、人名その他の統一がなされ、ようやくジュリー・デグルモンという女性の少女時代から晩年までを描い

た長篇小説という体裁が整った。

「三十女」の各篇は、結婚の幸福的追求、という「生理学」——「短篇集」の主題を忠実に受継いでいる。

第一篇「最初の過失」では、無知な少女の軽はずみな結婚の悲劇、という短篇小説に共通の物語がもう一度くり返される。

第二篇「知られざる苦惱」では、夫に幻滅した後生じた新しい恋愛に踏み切れずに恋人を死に追いやったことを悔んでいるジュリーに向って一人の老司祭が、世の中の法律と習慣に従うべきだ、と説く。実らなかった不倫の恋愛に対する哀惜の記憶が生々しいジュリーは、激しい言葉で、老司祭に抗う。

「今日、社会がその上に基礎を置いている結婚は、女性にだけ、そのすべての重荷を負わせています。」⁽¹⁾「今日行われているような結婚は私には合法的売春と思われま⁽²⁾す。」⁽²⁾「あなた方は、ゆきずりの男に数エキュと引きかえに身をまかす哀れな女を卑しめられる。(…)その一方では、社会は、別の意味で怖ろしい結合を、若い無邪気な娘と、彼女と三カ月以上は続けて会っていない男との即座の結合を許し、奨励さえしているのです。彼女は終身の約束で売られるのです。」⁽³⁾

ジュリーは、そのうえ、「生理学」総論のエピローグと同じく、女性から相続権と持参金を取除くことを主張する。

「三十女」は、構成の上でも、「短篇集」の「青年」対「老人」の図式を持っている。少女時代や、二十代のジュリーの傍には、彼女の父親や伯母、老司祭といった人物が立っている。やがて「青年」対「老人」の図式はゆっくり回転し、時の流れに従って老人達

が消え去ると、ジュリーの生命も衰えの徴しを見せ、代りに次の世代のエレノアやモイナが現れて、新しく彼女達とジュリーの間「青年」対「老人」の図式が出来上る。

「二度の出合い」で、ジュリーの長女エレノアは、幼時にジュリーが第二の恋人シャルル・ド・ヴァンドネスとの間にできた弟息子に偏愛するの嫉妬し、弟を川に突き落した記憶に悩まされ、成長してから殺人犯とともに家を出て、海賊の妻としてロマネスクな生活を送るが、のちに悲惨な最後を遂げる。臨終に立合ったジュリーは、昔とは逆に、法律や世間一般に受け入れられている思想の外には幸福は無いのだ、という結論を下す。

最終の章「罪ある母の晩年」では、ジュリーは「長い経験から、人生を知り、男を判断することを学び、世間を怖れることを知った」⁽⁴⁾五十五才の女として登場し、かつての自分と同じように無鉄砲に人生に踏みこもうとしている末娘モイナを諫める立場にまわっている。

人間形成の過程を辿る、という方法は「短篇集」に、既にその萌芽があったが、その場合は或る一つの事件、経験が一人の人間の或る一つの性格、運命を決定する、というものであった。「三十女」では、一人の女の一生の六つの場面が取り出される。そして最初の行為が次の場面の要因となり、第二の行為が第三の行為をひきおこす。一人の女の性格はこの六つの場面を通じて形成されてゆくのである。

「三十女」で主人公が最も威厳に満ちているのは第三篇「三十才」においてである。「女の顔は三十才にならなければ形をとりはじめな

「若い娘はただ屈服する。三十才の女は選択する。」

「三十女」以来、無知な少女が結婚後、次第に人生に目覚め、「生理学」の言葉を借りれば「自由意志と自己の尊厳の回復」に立ち上り、自我を完成してゆく、という物語の運びは、ユージェニー・グランデヤ「村の司祭」のヴェロニクの場合のように、バルザック小説の一つのパターンとなるのである。

「私生活場景」短篇集の短篇小説を幾つか縦につないで出来たのが「三十女」であった。「ゴリオ爺さん」は、同じく短篇を横に、同時空間的につないで出来た作品である、といえよう。この作品においてはじめて「人物再登場法」が発見されたのだった。

二人の娘から最初は八十万フランずつの持参金、以後九年間にわたり一百万フラン、一千フランとしぼりとられ、遂に生命それ自体を金に換えて吸い取られてゆくゴリオの悲劇は、一方に「ゴブセック」で描かれた彼の娘の一人レストー夫人の、全てのものを食いつくさずにはおかない破壊的な情事があつてはじめて成立する。

「ゴリオ爺さん」に直接関係するそれまでの作品は「ゴブセック」の他にポーセアン夫人のその後を教える「捨てられた女」、長年君臨した恋愛の王座から追われようとしているポーセアン夫人にさらに追打ちをかけずにはおれないランジエ夫人の焦慮を説明する「ランジエ公爵夫人」(パリ生活場景)がある。

しかし、それ以外に、ラスチニヤックがはじめて登場する社交界の舞踏会には既に短篇集の中に登場していた次の人物達が出席している。

ブランドン夫人(La Grenadière)ケルガルエ伯爵夫人(Le Bai

de Sceaux のヘミリー)、セリシィ夫人(La Femme de Trente Ans)、カリグリアノ公爵夫人(La Maison du Chat-qui-pelote 三版以後付加)、フェロ伯爵夫人(Le Colonel Chabert 三版以後付加)、デグルモン侯爵夫人(La Femme de Trente Ans のユリー)、マクシム・ド・トライユ(Godsbeck)

これ等の人物の背後には「短篇集」の主要作品が並ぶわけである。「短篇集」においては、既に、人生の種々の場面が描かれた。それら各場面を有機的に結合するためには、新たにもう一人、人生修業に乗り出し、それらの場面をめぐり歩く青年が必要であった。それがこの小説の主人公である二十二才のラスチニヤックである。

「好奇心に燃えた彼の観察と、パリのサロンに登場しおさせたその巧みな手腕とがなかったら、この物語もこれほど真実味のある色調で彩られはしなかつたであろう。それは将しく彼の明敏な頭脳の働きと、それを創り出した人々からも、それを耐え忍んでいる人々からも注意深く隠されている、ある慄然たる状況の秘密を見破りた」という彼の欲望に帰せらるべきであろう。」

「私生活場景」短篇集の「青年」と「老人」の図式がこの作品にも残っている。ラスチニヤックに人生と社会を教えるのはポーセアン夫人とヴォトランである。

ポーセアン夫人の手引で社交界に足をふみ入れたラスチニヤックに最初に強い印象を与えるのは「結婚の生理学」の筆者「若い独身者」に衝撃を与えたのと同じ、上流特権階級の女性の特殊な三角関係の情事である。レストー伯爵とレストー夫人とマクシム・ド・トライユ、ポーセアン侯爵とポーセアン夫人とアジュダ・ピント、ヌ

ツシンゲン男爵とヌツシンゲン夫人とド・マルセイ。

「(レストー伯爵が) マクシムの方に手を差し出し、「今日わ」とさも親しげな顔つきで言うのに、ウージエヌ(ド・ラスチニャック)はひどく驚かされた。田舎出の若者などには、この種の三角関係の気易さなど、到底、解りよう筈がない。」⁽⁸⁾

「生理学」と同じくラスチニャックの社会観察と分析もここから出発する。そして、巨万の富に埋れながら六千フランの小遣の工面が出来なくて情人のいいなりになり辱めを受けるヌツシンゲン夫人の取りみだした姿の中にラスチニャックが見るのは「現代社会機構が女性に止むを得ず犯させる過失」⁽⁹⁾であった。

このように「ゴリオ爺さん」もまた「結婚の生理学」を通り、「私生活場景」短篇集をめぐって後に、はじめて成立する作品であった。

しかし、「ゴリオ爺さん」では、「短篇集」におけるように「生理学」の命題が直接に引用されるような事はもはやない。観念的対照図式は、「ゴリオ爺さん」においても、小説の力強い骨組となっているのであるが、それも「短篇集」の場合のような二つの対照場面という単純な構成ではなく、そのような対照図式が幾組も組合った立体の構成になっているのである。その上を「短篇集」におけるより更に厚みをもした風俗描写がおおっている。

「私生活場景」は「生理学」、「短篇集」、「三十女」を通じて「ゴリオ爺さん」においてようやくはじめて、現実と同じ壮大な同時空間的ひろがりとし、高い密度をかね合せた「人間喜劇」の本来の世界に到達するのである。しかし、このような「私生活場景」の完

成が行われると同時に、「ゴリオ爺さん」は「私生活場景」を越えてしまうという現象が起る。

ラスチニャックの二人の教師ボーセアン夫人が婉曲に教え、ヴァートランがあげすけに話したことは、もはや「結婚の生理学」の「結婚は闘争である」という教訓ではなく、それを更に拡大した「人生は闘争である」、「世の中は瞞す人間と瞞される人間」、「つまり搾取するものとされるものの」寄り集りである、という思想である。「短篇集」の主人公の大部分は、家庭と恋愛の中にしか行動範囲を持ち得なかつた若い娘であった。「パリとの一騎打」をいどむことの可能な「青年」であるラスチニャックは「教育が完全に終了する」と同時に「私生活場景」を脱出してより広い「パリ生活場景」へ足を踏み入れるのである。

「人間喜劇」への入口を採すという作業は「ゴリオ爺さん」で終わった。それ以後に書かれ「私生活場景」に収められる作品は、すでに出来上ったこの場景の枠組を意識したものとなる。

註(1) La Femme de Trente Ans (Conard, tome VI) p. 94

(2) ibid.

(3) ibid., p. 100

(4) ibid., p. 209

(5) ibid., p. 206

(6) ibid., p. 112

(7) Le Père Goriot (Conard, tome VI), p. 229

(8) ibid., p. 281

- (9) *ibid.*, p. 373
(10) *ibid.*, p. 516
(11) *ibid.*, p. 488

六 「二人の若妻の手記」(一八四一年—四二年)

「ゴリオ爺さん」以後になると「私生活場景」には、多数の人物と事件を有機的に緊密に結んだ壮大な構成の作品はあらわれなくなる。「続女性研究」(一八四二年)にみられるようなサロンに集った社交界の人々が、一つづつ挿話を喋ってゆく、という「結婚の生理学」に逆もどりの平板で自由な形式をとるか、あるいは一人の主人公を中心に比較的単純な筋が展開する短篇か中篇小説の規模をとるようになる。

これらの作品の中で「結婚の生理学」以来の主題を徹底して追求し、「私生活場景」の性格をもっともよく表しているのは「二人の若妻の手記」である。

1、手法—観念小説の構成

「二人の若妻の手記」は書簡体小説である。

子だくさんの貴族が世襲財産の分散を防ぐ目的で娘を入れておく修道院から、持参金なしの有利な結婚のために出されて田舎へ帰るルネと、祖母の遺言の助けでパリの社交界へつれ戻されるルイーザの交換する手紙である。修道院に埋もれるはずだった人生を取りもどした二人はそれだけでなくよくにそれぞれの目的にとり組む。修道院の孤独の中で互いに議論しあって過した結果、現実にはあり得ないほど鍛錬された精神の持主になっているという前提がおかれてい

る。彼女達は自分の行動の目的を意識し、行動の効果を計算することが出来る。そこで読者は手紙によって彼女達の行動を知らされると同時に、その意味のこまかい分析も見せられるのである。

ルネの野心は、家族の繁栄—夫と子供を後だてして、地位と財産を獲得することである。ルイーザはパリの社交界の征服と純粋な恋愛の追求を目指す。二人の作中人物は、ことごとく対照的な性質を与えられている。

金髪のルイーザと栗毛のルネという身体的特徴。空想型と理性型という気質の特徴。恋愛型と母性型という心理の特徴。パリと地方、上流貴族と半ブルジョア的新興階級という環境の違い。しかし、何よりも二人の人物の対立は思想の対立である。

ルイーザが「ヌーベル・エロイーズ」に読みふけるととき、ルネはポナルドに没頭する。

ルイーザの社会観察は、「結婚の生理学」の出發と同じく彼女の両親ショリーユ公爵夫妻と詩人カナリスが形づくっている、社交界にはめずらしくない公然の三角関係に疑問を抱くことから始まる。ルイーザはルネのブルジョア的な結婚に対しても、娼婦の計算に等しい、という批判を投げる。彼女自身の二つの恋愛結婚は利害を無視すると同時に反社会の性格を帯びている。最初の夫はスペインの亡命貴族であった。第二の夫は「ざくろ屋敷」のブランドン夫人の不義の子と生れ、地位も財産もない無名の詩人である。この結婚にはさらに、田園における二人だけの完全な隠遁生活が続くのである。

「純粋に社会的なあなたの結婚と、幸福な恋そのものといったあ

たしの結婚とは、有限が無限を理解しえないようにお互いに理解し合うことがないのです。」(ルイーズよりルネへ)

一方、ルネにとっては結婚は契約であり、家庭は社会の基礎である。ルネもルイーズに「自然の法則と法典とは敵同志⁽²⁾です」と書き送る。そして社会の領域にある結婚の中に、自然の領域である恋愛を追求しようとするルイーズの無謀さをとがめる。

このように、二人の書簡には、日常生活の報告の間に哲学的な議論がはさまれるのである。

2、主人公―青年

ルイーズもルネも修道院を出たときは十七才の同じ年の少女であった。しかし、ルネの方は素早く老成をとり、相手に忠告ばかり書き送るようになり、ルイーズから「哲学者」、「スカートをつけた博士」と呼ばれる。一方ルイーズはいつまでも「甘やかされた子供」である。ルネが「一日のうちに青春を生贖⁽³⁾に供えて」打算結婚にふみきるのに対して、ルイーズの生き方は青春を完全に享樂することであった。ルイーズとルネの対立は、「私生活場景」短篇集にあった「青年」対「老年」の図式の変型に他ならない。この小説のロマネスクな部分をうけつ主人公は、ルネに代表される社会に対して反逆をこころみ、敗北する「青年」ルイーズである。

「三十女」のジュリー・デグルモンは二十代におけるあの社会の不条理をあばき、社会に反抗する姿勢を、三十代において放棄し、「青年」から「老年」へと自らの役割を転換させなければならなかった。「ゴリオ爺さん」のラスチニャックは、青春の最後の涙をゴリオの墓に埋めた後は、社会に対する批判ではなくて、その征服と

同一化を目指して「私生活場景」をぬけだしていった。

しかし「二人の若妻」のルイーズは、年下の愛人のために、自己の青春を永遠に延期する神話を願う。そしてこの不可能な努力の緊張の中で消耗して死ぬ。彼女は自らに三十才を越えることを禁ずるのである。ルイーズは「青春」そのものであるはずの「私生活場景」の真の主人公である。

3、主題―私生活Ⅱ結婚制度、女性の社会的地位、

結婚の幸福の哲学的追求という「結婚の生理学」以来の「私生活場景」の主題は「二人の若妻の手記」でもっとも純粋な形で展開されている。ルネとルイーズによって、二種類の結婚が実験されたのであった。

しかし、「人間喜劇」の序章である「私生活場景」は何故このような主題をもつのだろうか。また主人公の「青年」が人生に立向うとき、まず結婚制度の分析から最初の社会観察をはじめるのは何故か。

第一に、この主題が当時の文学に流行していた、という事実がある。特に階級の異なる結婚、というテーマは非常に多かった。またサン・シモン主義者を先頭に女性の解放についても広く論議されていた。

第二に、作者の体験も考えられよう。「結婚の生理学」には、ダブランテス夫人から多くの示唆を与えられたことがほめかされている。その他にベルニイ夫人も挙げねばならぬだろう。バルザックの青春時代の感情教育は、こういった年上の女性から授けられた。彼女達の影響が、バルザックの初期の視線を結婚制度と女性の

社会的地位の問題に偏らせたくもしれない。

しかし、バルザックは、女性の解放の問題を、その問題内だけで解決しようとするフェミニズムには行きつかなかった。「三十女」には「女性を解放することは、女性を墮落させることである。」という断定がある。「オノリーヌ」には、夫の家を出て誇り高い自活独立の生活を送っているつもりの女主人公が、実は夫の隠れた配慮のもとに、夫の所有の家に、夫の召使にかしづかれて飼われているにすぎなかったという皮肉な筋書が用意されている。

だが例えばサン・シモン主義者の場合も、彼らが女性の地位や結婚制度に注目したのは、家庭における夫と妻の関係の中に、社会全体を支配している *travailleur* と *oisif* の関係の反映、あるいは結果を見たからであった。バルザックは「生理学」の中で、女性の社会的地位についての考察は、大革命もその検討を怠った問題であると述べた。一段階を遅れた部分には、社会全体の矛盾が集中してあらわれる。

人生や社会を一目に見渡し、認識することを可能にさせるだけの経験をいまだ持たぬ青年は、まず、このような目立つ問題の前に立止まり、そこから思考をひろげはじめる。「生理学」序文には、樹木の結晶作用や、自己生殖をして増大してゆく粘膜^{粘液}の比喻を用いて、特殊で部分的な観察と分析から生まれた無数の観念が次第に一カ所に集まるという青年時代の思考法が描写されている。

「私生活場景」の主人公の「青年」は、人生の入口に立って、観察をはじめたばかりである。

現実社会は、彼の前に観念的な図式でもって説明されているにす

ぎない。彼はいずれ、このせまい場景を通りすぎて次の「壮年」にあたる、「人間喜劇」のもっと広々とした空間に入ってゆかねばならぬ。

「結婚の生理学」——「私生活場景」短篇小説集——「三十女」——「ゴリオ爺さん」——「人間喜劇」という創作の上での一つの道筋をも仮定してみた。バルザックの観念小説と、いわゆるリアリズム小説と呼ばれているものとの関連を考えてみたからである。

註(1) *Mémoires de deux jeunes mariées* (Conard, J.), p. 279

(2) *ibid.*, p. 237

(3) *ibid.*, p. 225

(4) Jean-Hervé Donnard; Balzac, *Les Réalités économiques et Sociales dans la Comédie Humaine* (Armand Colin) Chap. II